

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 6年 6月 8日
(133号)

中之島ニュース

[事務局] 〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
事務局 古田修平
編集長 西村俊幸

「捨てなければ得られない」

市川 英俊 先生

(五月度特別講義より)



■内観で意識する三つのこと

森信三先生一筋に生きられ、全国津々浦々を回られた、寺田一清先生との思い出、尊敬の念は尽きません。先生に教えたていただいた「そやな」「ほんまや」「そのとおり」は相手を認める人間関係の基本となる言葉。十年間父の介護をしていたときも、父の言葉に「そうだね」と受け答えストレスもなかったと思えます。

「内観法」は、吉本伊信先生が考えられました。内観法では三つのことを意識します。「お世話になったこと」「してお返ししたこと」「ご迷惑をおかけしたこと」。私自身も初めてこれに取り組んだとき「自分はどれほど人様にお世話になり、そしてどれほど人様に迷惑をかけてきたことか」という気持ちになりました。その帰りの電車ではどの人も親しく握手して回りたいような思いに駆られたのを覚えています。この内観法は刑務所でも取り入れられており、暴力団の組長が内観をやった結果、暴力団を解散し、地道に働き始めたという話もあります。教師をしていたときに子どもたちが内観をするとても効果があり、たちまち変わることを体験して以来、教育の現場で「立腰」と「内観」の必要性を確信いたしました。

■浮浪児・卯一の話

三上和志先生は一燈園で修行された方です。著書『人間の底』には先生の体験談が記されています。先生がある病院で講話を頼まれたときのこと、院長先生から入院患者である十八歳の少年と話をしたいと頼まれました。

病院は少年を警察から預かっているという事情でしたが、現在重篤な結核に罹っており、また身寄りもなく大変荒れて手を焼いているとのことでした。当時結核は不治の病であり、感染が恐れられていましたが、先生はマスクなど防護することなく少年と面会されました。ところが、どのように少年に声をかけても知らん顔。院長は諦め部屋を出ていき、先生も駄目か、と部屋を出ていく寸前に振りかえる少年がこちらを見ていた。その人恋しい目を見た時、先生は病室に一晚残って話をすることになりました。少年はげっそり痩せ、黒い顔をしていました。相変わらず話しかけても返事はないが「足をさすっていいか？」と申し出ると断りはしません。先生はその少年のまるでミイラのようになってしまった足をさすったそうです。すると少年が「おっさん、お前の手あったかいな」。その子にとつては、人に触れられたというのが初めてのことであったのでしよう。そうしてその少年・卯一は生い立ちを少しずつ話し始め、両親がいないこと、転々と預けられていること、預けられた先で大人から暴力を受けてきたことなどを話します。そして逃げ出した先でお金を盗んで警察に捕まり少年院に入ったものの、肺病で入院することになったとのことでした。そうこうするうちに夕食の時刻となり、卯一に匙で粥を食べさせてやります。しかしほんの少ししか食べられない。その食べ残しを卯一は先生に「食べろ」と言います。その目はまるで試すように先生を見つめていた。そうするならお前を信じる、とでもいう目。先生は残りの粥を卯一に食べさせた匙で全部食べてしまいました。

卯一は心を開きぼつぼつと話を始めます。「おっさん!」「なんだ」「笑ったらいかなぜ」「笑わんよ」「一度でいいから“おとつあん”て呼んでいいかい」卯一は「おとつあん」と泣きながら何度も呼び、先生も返事をしたそうです。

先生は夜を徹して卯一と話をして過ごしました。「人間は人の役に立つために生まれてきている」と話すと、卯一は「俺はもう死ぬから役に立つことなどない」と言う。先生はそんな彼に「病院で自分に携わってくれる人々に感謝することが“役に立つこと”」と伝えます。

翌朝になり、先生が朝食を摂るために別室にいった間に卯一は静かに亡くなりました。毛布をめくると胸の前で合掌し亡くなっていたそうです。

■貸し方の生活

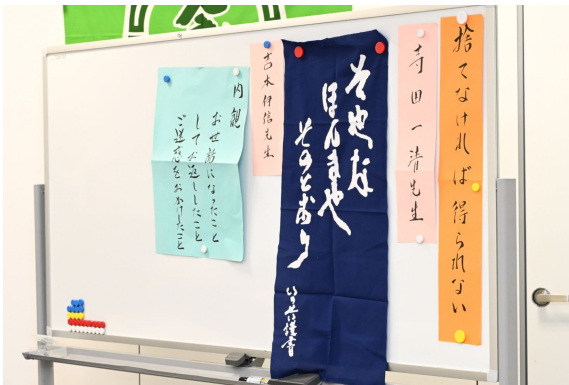
大本利明先生は貸し方の生き方を貫いた方です。先生は、若いころ尊敬していた人から仕事の手伝いを頼まれ、田畑などすべて人に譲って無一物で上京されます。西田天香先生、西岡常一先生、安岡正篤先生などさまざまな先生のもとで学ばれ、定職に就いたのが五十を過ぎてからだそうです。質素な暮らしをされていましたが、先生は亡くなる二年前に東京読書会で「天に財宝を積みおくもの」という演題で天の神様に宝を預金する、と話されました。そのためには人に知られぬよう陰の徳を積みおくこと。貰う給料以下の仕事で済めば得、それ以上の仕事をしたら損、と普通は思うだろうが、貸し方の生活ではそれは逆になる。どうしたら人のお役に立てるかが生きがいだと話されました。「私はお金は持たないが、必要なときには入ってくる」とのお話でした。

何ひとつなき身なれど

何ひとつ不足思わぬ暮らしなりけり

まさに清貧を生きられた方です。

(抄録 中川千都子)



講師紹介 近藤 宏枝 世話人



「一言講話」
毎月、世話人が講話します。
5月は、加藤 昌夫世話人。
ありがとうございます。



三つの誓い 西村 俊幸世話人

グループ討議

市川 英俊 先生

◆Aグループ

- ・そやな・ほんまや・その通り
- ・貸し方の生活　　く陰徳を積む
- ・捨てなければ得られない。

◆Bグループ

- ・貸し方の生活
- ・御霊を清める事が大切

- ・人は誰かのために生まれてきた

◆Cグループ

- ・人に喜んでもらう生き方

- ・今日死んでも悔いが残らない生き方

- ・そやな・ほんまや・その通り

◆Dグループ

- ・身につく苦労・つかない苦労

- ・貸し方の生活

- ・最後の歌がよかった

◆Eグループ

- ・合掌の姿で亡くなった話

- ・貸し方の生活

- ・そやな・ほんまや・その通り

◆Fグループ

- ・貸し方の生活

- ・人は誰かのために生まれてきた

- ・名利の念を避ける

読書会「一語一会」「ありがとうございます」

「一語一会」

指導　近藤 宏枝 世話人

五月二日

五分の時間を生かせぬ程度の人間に、大したことは出来ぬと考えてよい。

五月九日

仕事を処理する上での最大の秘訣は、思い切って着手するということです。「とにかく手をつける」ということ、すなわち即今着手にありと言ってよいでしょう。

五月二十二日

人は退職後の生き方こそ、その人の真価だといつてよい。退職後は、在職中の三倍以上の五倍の緊張をもって、晩年の人生と取り組まねばならぬ。

五月二十四日

人間は自己に与えられた条件をギリギリまで生かすという事が、人生の生き方の最大最深の秘訣。

○一言メモ

読書会の輪読を進める中で「一語一会」に五月三十一日がないことに初めて気づきました！この謎をご存じの方はいらっしゃるでしょうか…。

「ありがとうございます」

指導　中川 千都子 代表

55 「言葉の通りに、思いの通りにすべては成る」というのが、宇宙の法則です。最高の祈り言葉「ありがとうございます」を、日常茶飯事に唱え続けることは、神様と一体の自覚を深めてゆく為の、一番易しくて、効果のある方法です。

62 人間の本当の心とは、歓喜の心なのです。人間の本性は、歓喜そのものです。歓喜の心を解放すれば、苦しみは消えるのです。

72 五欲の心の奴隷となるな！五欲とは財欲・名誉欲・色欲・食欲・睡眠欲のことです。五欲の奴隷状態から解放され、自由になる為には、宇宙の大神さまと一体の自覚・本心の自覚を深めてゆかなければならないのです。

○一言メモ

「ありがとうございます」は、祈りの言葉。大和言葉は一音ずつに意味がある。

寺田 一清 先生に導かれて 近藤 宏枝 ⑬

「日本人の心根に学ぶ」

この度講師としてお迎えする白駒妃登美先生のご講話を初めて拝聴したのは、十年ほど前「人間学塾・中之島」の正にこの場所から始まりました。当時先生は「博多の歴女」と呼ばれ、歴史講座を各地で開かれていました。

先生は、大手航空会社の国際線客室乗務員という華やかな経歴をお持ちです。その頃は景気がどんだん上向いて、多くの日本人が勘違いをした生き方をしていて、日本人である誇りも感じていなかったように思います。

お話の中で「日本人だからというだけで、海外では信用してくれる」事に、違和感を覚えられていたそうです。現代人が感じる日本人と、先人が諸外国で示してきた本来の日本人の姿は、少しずれがあるように思えました。

古来日本人は、自分の置かれた場で「道」を求めてきました。そしてその道の中核を成すのが「惻隱の情」だと説いて下さいました。

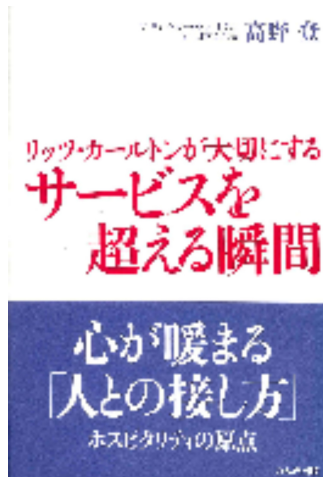
それから私はその一年後に、徳島在住の道友の方が主催する会で、再び白駒先生のご講演を拝聴出来る機会が巡って参りました。その時ももちろん歴史から日本人の生き方を説いて下さいましたが、なかでも関が原の戦で別れ別れになった宇喜多秀家と豪姫の夫婦愛に心打たれました。戦に破れた秀家と二人の息子は八丈島に流され、豪姫は加賀前田家に戻されました。加賀藩から八丈島に援助が送られますが、秀家は加賀から送られてくるお米を、独り占めせず島民達に分け与えました。それは豪姫亡き後も、明治に至る二五〇年間続いたそうです。島民の方々は四百年経った今でも、金沢に在る豪姫の菩提寺・大蓮寺を訪ねられ、ご先祖に代わりお礼を述べる方が居るのだとお話下さいました。私は日本人の心根に、改めて深く感じ入ったのでした。

《人間学塾・中之島》次月日程

○日時 7月13日(土) 13時
○場所 大阪大学中之島センター 6階
○講師 高野 登先生
○テーマ 新時代に求められる資質とは
～ホスピタリティ的生き方～



長野県出身。ホテルスクール卒業後、アメリカへ。プラザホテルなどを経て、リッツカールトンホテル日本支社長に。その後、人とホスピタリティ研究所を設立。



卒塾文集原稿

ご提出をお願いします

提出期日

6月末日

提出先

メール 中之島編集部

手書き 事務局

人間学塾・中之島

編集部メールアドレス

2012nakanoshima@gmail.com

中之島ニュースは塾生の皆様のためのものです。

無断で転載・配布・SNS利用などはご遠慮ください。

編集後記

東京都・新島からお越しいただきました市川英俊先生。なんと早速、お葉書をいただきました。即今着手。さすがだと改めて実感しました。

私は催眠術師です。皆様を眠らせます：いやいや。感動的なお話を頂け、また涙ながらに語るお姿は素晴らしいものでした。

「そやな・ほんまや・その通り」寺田一清先生のお言葉を改めて感じたのでした。さて、早いもので今月・来月で講座の開催は終了となり、八月は卒塾式です。今期、感じられたものを早急にまとめ、て卒塾文として、ご提出をお願いします。積もるお気持ちはわかるのですが、**800字以内厳守**でお願いします。

編集長 西村俊幸